

博報財団 第13回「博報日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名(フリガナ)	STEININGER Brian Robert(スタインINGER ブライアン ロバート)
在住国名	アメリカ
所属・役職	プリンストン大学東アジア学部 助教授
招聘回(招聘研究期間)	第13回 (2019年3月1日～2019年8月31日)
受入機関	早稲田大学
招聘研究テーマ	鎌倉・南北朝期の書物的ネットワーク: 写本・版本の流通と相互関係
研究目的	書物の形体の変化に伴って、中世における漢学が如何に変わったかを探る
研究成果概要	
<p>1. どのように研究を進めたか(具体的に)</p> <p>主たる研究活動は文献調査であり、早稲田大学の図書館を拠点に、東洋文庫、国立公文書館、石川武美記念図書館、慶應義塾図書館、慶應義塾大学附属研究所斯道文庫、天理図書館(奈良県)等所蔵の十四世紀日本製印刷物(いわゆる「五山版」)を中心に、基礎データを著録して、周辺資料(禅僧の語録など)の精読を続けた。同時に、輸入書物の実際利用の理解を深めるべく、早稲田大学と慶應義塾大学で行われている、中国文学の日本受容をテーマにした2つの研究会に毎週参加した。個人的な学術交流の他に、5月に早稲田大学で、7月にハノイ大学で講演を行った。</p>	
<p>2. 研究によりどのような知見が得られたか(具体的に)</p> <p>何よりも、写真でしか見なかった五山版を数十点も身近で詳しく調査する経験は、物質的な存在としての本の寸法・利用法についての見識が深まったと思う。それに加えて、この数ヶ月の研究で特に下記の三点について理解が進んだ:</p> <p>○中世漢学における武士の存在一従来から北条実時のような例外的なケースは注目されてきたが、今回の奥書や記録類の調査により、博士家から儒学を学んだ武士の未発表事例を数人も見つかリ、漢学が従来説明されてきたより遥かに御家人層に浸透した可能性が高まってきた。</p> <p>○本の形と読み方一博士家を中心とする朝廷の学問は写本文化で、卷子本であるテキストに平古止点や裏書を付けることで便宜を図る。版本の学問に移る禅僧は、その学問方法を受け継ぐが、例えば版本の非常に薄い紙に対応して、行間に透けて見える形の裏書を付すなど、実験的にその方法を変えて行く。</p> <p>○学問変容における偈頌の重要さ一偈頌とは、禅宗の中で行われる仏教的な漢詩のことだが、初期(一四世紀なかば)の五山版は中国禅僧の偈頌集の復刻が多く、また日本で新しく編纂されたものも早く出てくる。偈頌の作成は多面に渡る学問が必要とされていて、そのための辞書類まで編纂され流布することになり、臨済宗の学問の重要な原動力と捉えたい。</p>	
<p>3. 研究成果(予定を含む)</p> <p>○論文(題目, 掲載誌, 発行者, 掲載月, 内容の概略(200字以内))</p> <p>・「家学の漏洩一南家本『貞観政要』を端緒として」『芸文研究』一一七号(二〇一九年一二月):一三世紀後半に書写された『貞観政要』の南家本(宮内庁書陵部蔵の巻一と個人蔵の巻二以下)は同作品の最古写本してつとにそのテキストが注目されているが、その詳細に施されている訓点と各巻の奥書は中世学問の伝播と変容についても貴重な資料でありながら、未だに十分に考察されていないので、本稿はその解読を試みる。</p> <p>・「国風駢儷体の形成一平安中期の転換」『日本文学研究ジャーナル』一四号(二〇二〇年六月):願文などの唱導文学が中世の和漢混淆文の形成に及ぼした影響は古くから研究されている問題であるが、逆にそういった儀式的な四六駢儷体の漢文の日本における規範が直接言及されることが非常に少ない。本稿は『本朝文粹』を題材に、平仄の問題</p>	

に着目して、平安中期における漢文の模範の変革を論じる。

○口頭発表(題目, イベントの名称, 日・場所, 内容の概略(200字以内))

・「日本漢詩文における規範と破格——平安中期の「国風」の発見を見直す」早稲田大学大学院文学研究科の講演、二〇一九年五月九日:平安時代中期は和歌や物語が隆盛する「国風文化」の時代と見なされてきたが、この時代を通じて漢詩文の作成が已然と盛んであった。本発表では漢詩文の中の変容と、それに対する国・俗・本朝の思想が現れることの意味を「国風文化」論の中で捉え直す。

・「前近代日本における訓点と自言語化」漢喃研究院(ハノイ)、二〇一九年七月二四日:日本独自のものとされてきた訓読・訓点に類似する現象が近年東アジア各地に指摘されてきて、漢字文化圏の構造に対する理解が大きく動揺している。本発表は日本の訓点資料の本質と利用について説明して、国際的研究の課題を素描する。

・「On the Edge of the Cosmopolis? Parallel Prose in Thirteenth-Century Japan」Modern Languages Association Annual Meeting、二〇二〇年一月一〇日:漢字文化圏というのは、識字表記行為の側面と、ある程度政治的な団体関与を意識する側面に、何らかの因果関係を示す概念であるが、その関係は必ずしも明白ではない。本発表は、金沢文庫に残る願文類など、周辺の漢文作品を考察して、その政治的意図と普遍的な漢文模範との関わりを問う。

・「国風駢儷体の形成—平安中期の転換」東洋学会、二〇二〇年五月一六日:論文欄参照。

○その他の活動

・「江湖[風月]集抄」輪読会、慶應義塾大学(発表当番二〇一九年四月一日、五月一七日、六月二一日、八月八日)

・李嶠『百詠』研究会、早稲田大学

4. 今後の活動予定

二〇一五年以来の研究成果をまとめて、単著を刊行すること。また、東アジアにおける漢文の連続性と固有性についての研究を、コロンビア・プリンストン大学連盟主催コロキウムシリーズを中心に促進する。